

第二十二回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

互 盛央 著

『フェルディナン・ド・ソシュール

〈言語学〉の孤独、「一般言語学」の夢』

(2009年7月8日 作品社 刊)

互 盛央 たがい もりお 昭和47年(1972)生まれ。東京都出身。専攻は、言語論・思想史。1996年、東京大学教養学部教養学科フランス分科卒業。同年、株式会社岩波書店入社(現在に至る)。2000年、東京大学大学院総合文化研究科言語情報科学専攻修士課程修了。2008年、同博士課程修了。博士(学術)。現在、株式会社岩波書店勤務。雑誌『思想』編集長(2007年4月より)。論文に、「言語という正義—ソシュールとデリダの言語論」(『言語態』第4号、2003年10月)他がある。

受賞のことは

名誉ある賞に選んでいただき、驚愕するとともに心からうれしく思っています。

本書は社会人学生として博士号を取得した学位論文です。アカデミズムに属するのではなく編集者を生業とする者だからこそ可能なことがあると信じて執筆しましたが、それは異容を呈する妄執の産物に至るのではないかという恐怖に脅かされる経験でもありました。それだけに、受賞の報に接して何より安心したというのが偽らざる気持ちです。本書はすでによく知られた言語学者を扱ったものですが、その全貌と本質に迫るためには、テキストの精読はもちろん、歴史の中に生きた一人の人間としての姿を描かねばならない、との思いに貫かれています。それゆえに要請された多様な領域に及ぶ叙述にひどく苦しみましたので、博覧強記を体現する和辻先生の名を冠した賞をいただくのは恥ずかしいかぎりですが、現在編集長を務めている雑誌の初代編集長がほかならぬ和辻先生だったことを思うと、深い感慨とともに言い知れぬ喜びを覚えずにはいられません。このたびは本当にありがとうございます。

《選考委員評》

「ソシュール」という情熱的・野心的な試み

加藤 尚武

スイスの思想家・芸術家には、西欧文化の中心にありながら、しばしばまったく独自の境地を切りひらく人がいる。ソシュール(一八五七—一九一三)は言語学者であるが、画家セガンチーニ(一八五八—一九一九)がまったく他の潮流の影響を受けることなく、独自の純粋な境地を描き出したことと並べてみたくなる。セガンチーニは、自分が置かれているアルプスの透明な空気の中での事物の光と影を徹底的に描写しようとしていた。ソシュールにとっては、言語が、自分がその中に生きる透明な空気のようなものであった。

言語学者が、化石の分類でもするように、古い言葉を並べて、その変化を説明する仕方が、ソシュールには我慢がならないほど、いかがわしいものに思えたに違いない。「言語とは言語学者が説明するようなものとはまるでちがう」という思いを抱いた言語学者が、ソシュールだった。

そのいらだたしい思いを、互盛央さんの「ソシュール」は、まるで精神病理学者の病歴調査のように綿密にたどっていく。そこにはソシュールの原資料だけを、わずかな言葉のかげりのようなものまで読み取って、その思想を再現しようとする情熱的な試みが、繰り返される。

その純度の高い資料解読の営みが、同時代のさまざまな思想動向の描写に囲まれている。フィヒテの愛国心とその言語観と深く結びついていたこと、ニーチェのつけた「神の死」が過去の文献学との決別と不可分の関係にあったこと、などなど、これまでのソシュール研究

が触れてこなかった、同時代の思想動向が多面的に描き出されている。

資料の解説によるソシユール言語思想の展開と同時代の思想状況の描写というまったく異質なものが、互盛央「ソシユール」という同一の画面のなかに描き出されている。「この構図はまったく失敗だ。ソシユールにとって同時代の思想動向は、言語学プロパーの動向を除けば、まったく無視されていたのだから」という結論が正しいのかもしれない。しかし、そういう結論を生み出すためにはひとまず同時代精神史という背景のなかにソシユールを描き出して見るよりほかはない。

関根 清三

若くして天才的な言語学者として誉れ高かったソシユールは、生涯一冊も著作を刊行しなかった。しかしジュネーヴ大学で教授の任期中、三度「一般言語学講義」を試みており、二人の弟子バイイとセシユエがその自筆原稿と数人の聴講者のノートを元に、師が亡くなって三年後に同名の著書を刊行する。一九一六年のことであった。これは、その後の構造主義などに甚大な影響を与える名著との評価が高いけれど、二人の弟子は講義には出ておらず、実際の講義と死後出版の著書の間かなりの懸隔があった。そのことを一九八〇年代に丸山圭三郎氏が、厳密な比較を通して明らかにした。互盛央氏の研究は、その方向を、三度の「一般言語学講義」の一言一句をもゆるがせにしない精密周到な読解によって、より高い次元で先に進めたものと位置づけることができるだろう。そればかりか、一九世紀の言語学史、ドイツ法学や歴史学等の思想史的背景を丹念に辿り、またパリでの名誉ある地位を受けずに故郷のジュネーヴに戻ったソシユールの愛国精神、反ユダヤ主義、執筆恐怖症等々、伝記的な側面にも分け入り、総合的にソシユールの魂の息遣いまで再現しようとする。二段組で六〇〇頁を超す、自ら「ソシユールに憑かれた」と称する著者の、驚嘆に値する労作である。

ただソシユールがこだわったのはどこまで普遍的な問題だったのか、それとも余りに自己懷疑的な天才が非生産性へと停滞してしまう個人的な悲劇を表わしているのか、或いはその両方なのか、問いは開いているように見える。また丸山氏以降のソシユール解釈との対決、或いは出版された『一般言語学講義』の影響史と、ソシユール自身の講義に差し戻してのその評価なども、今後著者に書いていただきたい気はする。しかしこの労作は、そうしたことを現段階では全て措いて、ソシユール以前の思想史の流れとソシユール自身の思索の葛藤に、言語と言語学の迷宮を誠実に敏感に洞察した稀有の魂の軌跡を探り、それを断簡零墨に至る諸文献を自家薬籠中の物として駆使し、その眼光紙背に徹する精到な読み解きによって呈示することにあつた。

二十二回を迎える本賞の歴史で学術部門においては、大学外で活躍しておられる受賞者は初めてである。編集者としての激務と重責を果たされつつ、このような学問的労作を物された才能と御努力にまた深い感銘を受けるのである。

黒住 真

十九世紀末から二十世紀にかけて文科系の学術は、言語をめぐっての問いを懐いて働き続けてきた。そこにおいて問題は、当然ながら、国語として決定された世界をさらに越え、私たちの言葉自身を遡る働きともなる。そして、言葉と表現の本性ははたして一体何なのか、様々な地域の彼方のどこに言葉があるのか、誰がどのようにそれを働かせているのか。こうした複数の事象を根本的に基礎づけようとする営みが展開する。この原初的体験をまさに身に帯びて行いながら道を示した人物としてフェルディナン・ド・ソシユール（一八五七 - 一九一三）がいる。

ソシユールの仕事は、日本では、小林英夫（一九〇三 - 一九七八）、丸山圭三郎（一九三三 - 一九九三）といった方々を始め、多くの人々が具体的に知るものとなってきた。そこに関心が多かったのは、日本においてとくに問題が問われる必要があつたからだろう。とはいえ、ソシユールは彼自身、形づくられた言語（ラング）と話し言葉（ランゲージュ）とのダイナミックな社会的活動に介入している。彼は、その問題をめぐって、言葉を表しながら言

語を語っている。その状態は、人々にまだ十分に伝わり知られるところではなかった。ただ、彼が晩年に行った講義が、記録され残されている。

この講義の重要さは、何度か研究者によって指摘され、次第に翻訳されている。しかし、その内容は、まだ十分踏み込んで人々に理解されるものではなかった。これに対して、互盛央氏は、ソシュールの人生とこの講義に深く入り込み、その記録をはっきり残し続けていく。ソシュールの重要な三つの講義に、ご自身、具体的に関与し、のみならずそれを様々なコンテキストと歴史において位置づけていく。そこには、作者だけでなく編者でもある氏の産婆のような大きな仕事が記述されている。翻って、そこには人々に示すところとても大事なものがああり、読者はいくつもの重要な示唆をそこから得るだろう。

私自身は、ソシュールの言葉・記号をめぐる問いを知ることで、それが、結局、どのような哲学倫理的あるいは宗教的な次元に関与したのか、しなかったのか、そのあたりを知りたいと思った。そのことは、二十世紀の〈言語学〉が、はたして人々にとって何だったのか、また今後何となるのか、なるべきなのか。その方向を示すことになるのだろう。本書はそのための大事な手掛かりと問題を与えてくれるに違いない。そのように考えている。